

## 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性

日 時： 2016年9月30日（金）9:00～12:30

会 場： 北九州国際会議場会議室

主 催： 渥美国際交流財団関ログローバル研究会（SGRA）

助 成： 東京倶楽部

## ■フォーラムの趣旨：

渥美国際交流財団は、過去2回のアジア未来会議で円卓会議を開催し、日本研究のあり方について検討してきた。2015年7月に東京で開催されフォーラム「日本研究の新しいパラダイムを求めて」においては、公共財としての日本研究に焦点を当てた。

東アジアにおける長期的な平和と安定を保障するものは、信頼に基づく協力関係である。1930年代の日中全面戦争までのプロセスが物語るように、経済・貿易関係だけでは、平和は確立できない。そして、終戦70年を迎えたいま、この地域の信頼醸成に不可欠な「和解」は未だ実現されていないという現実、我々は直面しているのである。

戦後の東アジアでは、部分的に和解は達成された。しかし、このような和解は政府同士の「戦略的」判断と民間の「友好的」運動に支えられてきたものであり、持続できるものではなかった。現在、この地域で求められているものは、共有する「知」を基礎にした和解である。

日本研究をこのような「公共知」に育成することの意味は無視できない。近代日本はアジア諸国と複雑な関係を歩んできた。日本が経験した成功と失敗をアジア全体が共有する財産に昇華させることは、歴史を乗り越えることでもある。このような認識に基づいて、渥美国際交流財団は連続2年間「日本研究」をテーマに議論を深めてきた。

次のフェーズにおいては、「中国研究」や「韓国研究」も「日本研究」と同様に東アジアの「公共知」に仕上げる可能性を探ることである。しかし、三カ国が知の共有空間を構築するために、まず歴史認識の違いを乗り越えなければならない。いままで三カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話は、まだ深められていない。「国史たち」を対話させることで、共有する「日本研究」「中国研究」および「韓国研究」への道が開かれ、日本の「アジア研究」に「日本研究」を取り入れる環境整備にもつながる。そして、このような研究環境の整備と研究成果の発信は、東アジアにおける和解の実現に大きく貢献するに違いない。

## ■プログラム：

総合司会：彭浩（ほうこう Peng Hao; 大阪市立大学社会科学系研究院准教授）

開会挨拶 9:00

【問題提起と現状報告】 9:10～10:30

問題提起：なぜ「国史たちの対話」が必要なのか/国史研究各国の国史研究と現状（20分）：

劉傑（りゅうけつ、Liu Jie：早稲田大学社会科学総合学術院教授）

報告：日本の国史（研究/教科書）において語られる東アジア（20分）

三谷博（みたにひろし、Mitani Hiroshi: 跡見学園女子大学教授）

報告：韓国の国史（研究/教科書）において語られる東アジア（20分）

趙琬（チョカン、Cho Kwang：高麗大学名誉教授、ソウル歴史編纂院委員長）

報告：中国の国史（研究/教科書）において語られる東アジア（20分）

葛兆光（かつちょうこう、Ge Zhaoguang：復旦大学文史研究院教授）

【円卓会議】 11:00～12:30

モデレーター：南基正（ナム・キジョン Nam Kijeon: ソウル大学日本研究所副教授）

討論者 金キョンテ（韓国学中央研究院）、鄭淳一（明知大学）、徐静波（復旦大学）

橋本雄（北海道大学）、八百啓介（北九州市立大学）、松田麻美子（早稲田大学）

12:15～12:25 総括：劉傑

12:25～12:30 閉会挨拶：李恩民（桜美林大学グローバルコミュニケーション学群教授）

【同時通訳】（日本語⇄中国語）丁莉（北京大学）、宋剛（北京外国語大学）

（日本語⇄韓国語）金範洙（東京学芸大学）、李へり（韓国外国語大学）

（中国語⇄韓国語）李麗秋（北京外国語大学）、孫興起（北京外国語大学）